

## 中国あれこれ (2)

日本原子力研究所

成田 孟

narita@cracker.tokai.jaeri.go.jp

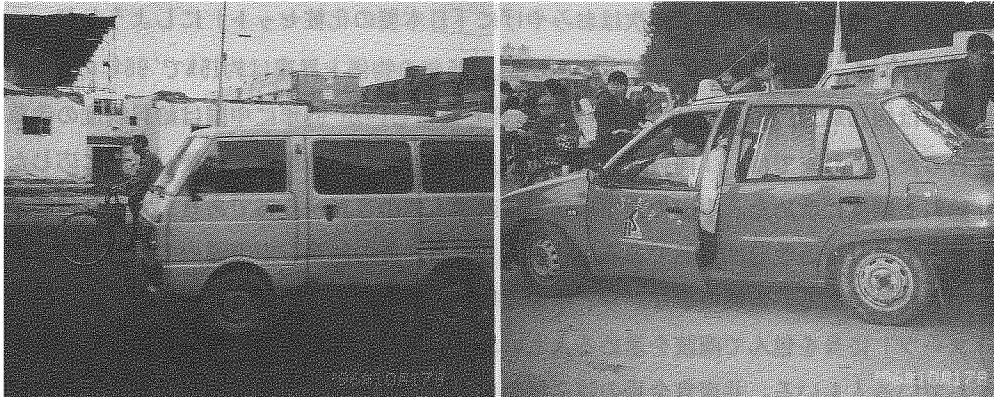
この度、研究者の国際交流制度の一環として、1996年10月初旬より10月中旬まで約2週間、中国の研究所や大学を訪問する機会を得た。今回は核データ・センターの柴田氏と同行した。中国での核データの活動や研究所および各大学での核データの活動状況は、すでに諸先輩により核データニュース等に掲載されているので、ここでは、前回(1992年・核データニュース、NO. 44)との比較等も含めて、中国での滞在中の感想を述べてみたい。

### 前回とどこが変わったか

まず、〈タクシー(的士または出租汽车)〉が非常に増えてきたことでありそれに伴い、いろいろとトラブルが起きている。トラブルの一つは、交通渋滞である。前回にはなかったこの渋滞は、道路交通網が整備されないうちに、急激に車が増加したために、中国国内の大都市の至る所で起きている。私が目撃したある信号機のない交差点は(もっとも信号機のある交差点が珍しいが)、前後左右から車は来るし、人々は横断歩道のない道路を横切るし、でござの通り自転車の洪水がその間を縫うように割り込んでくるし、おまけに、場所によっては、パコパコと馬車も割り込んでくる。さらに、中国では、車のクラクションや、自転車のベルは、自分の存在を主張するもので、目の前に人が横断していても、クラクションを鳴らしてそのそばをスピードを緩めずに通り過ぎて行く。つまり、「俺はここにいるぞ、もし、お前がぶつかったら、お前の責任である」と、車も自転車も主張するのである。その喧噪たるや、日本の地下鉄の車内の騒音の比ではない。これでは「事故が多いだろう」と、中国人に訪ねると「それほど多くはない」との答えである。もし、万が一、交通事故が発生したならば、それこそ大変である。当事者同士が、その場で、お互いに前述した自分の主張を述べ始め、また、自分のミスを認めようとはしない中国人同士が議論を始めるとエンドレスになる。その周りを、野次馬が取り囲む。で、わいわいがやがやが始まる。この野次馬たちは、決して暇なのではなく、中国人は人一倍お節介なだけである。

トラブルの2つめは、近年、外務省の外郭団体「(財)日本外交協会」の中国情報によれ

ば、タクシーを巡るトラブルが増加している、と聞く。特に、タクシー料金に関するトラブルが多い。そこで、中国国内（北京・上海・天津）のタクシーについて簡単に述べる。現在、中国国内を走っているタクシーは、だいたい2種類に分けられる。1つは、面包车（中国人は”バット”と呼んでいる、色は黄色、約5000CCクラス、ワゴン型の軽自動車）と一般的士（10000CCクラスかそれ以上）で、面包车の場合の料金は、最初の5 Kmまでが100円で一般車の場合は、150円でその後1 kmごとに窓に表示してある金額（1元～2.5元）である。やむを得ずタクシーを利用する場合は、最初に行く先を告げつぎに料金を聞き法外な料金の場合またはメーターがない場合はやめた方が無難。タクシーに乗ったらすぐに、運転手の隣に表示してあるタクシー会社の名前、ナンバー、運転手のID番号を記録し、できれば領収書（发票）をもらうこと。もし、法外な料金を取られた場合は、北京市公安局または下記の日本語サービスまで。もし、移動のために乗り物を利用するならば、公共バスよりは料金が多少高めでもミニバス「小公共汽车」がおすすめ。このバスは行く先が表示されているので、自分の行きたいところを示すだけで目的地へたどり着ける。



左側が「バット」と呼んでいるワゴン型の軽乗用車 右側が普通乗用車型のタクシー  
前回と変わった点の2つめは、〈荷物の検査が厳しくなった〉ことである。ということは、それだけ治安が悪くなったということかな。「毛主席記念堂」や「北京駅」は空港並のX線検査やボディチェックがあるし、「故宮」や「中国歴史博物館」や大きな建物に入場する場合は、ハンドバック以上の大きな荷物は「収包所」へ預けなければならない。ここで注意しなければならないことは、この「収包所」は切符の「発売所」が終了すると同時にこの「収包所」も終了するので、終了時間がぎりぎりの時は、入場しない方が賢明である。我々が天安門広場に到着した午後3時頃のことである。この日は「毛主席記念堂」を見て「中国歴史博物館」を見る予定であったが「毛主席記念堂」を見学し「中国歴史博物館」へ向かったときにはすでに門は閉じられており「収包所」も閉じられていた。この日は「人民大会堂」で人民大会が開かれており中国の要人たちが集合しているので早めに閉

館した、とのことであった、しかし、このことは我々と同行した中国人たちも知らなかったそうである。もし、このとき荷物を受け取れなかった場合はどうなるのでしょうか。

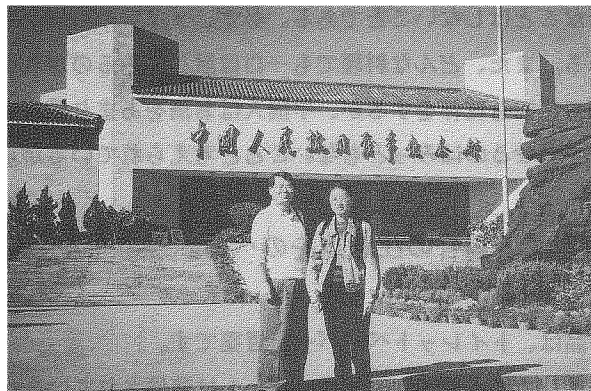
**3つめは、〈女性が美しくなった〉**ことである。特に「上海」の町では、きれいにお化粧したミニスカート(迷你裙・あなたを迷わせるスカートの意)の女性が町中を闊歩しており、ここは東京ではないか、と錯覚におそわれる。しかし、ここは中国である。いったいこの人はいつ風呂に入ったのかしら、と思わせるような女性や、この人は「化粧」と言う言葉に一生縁がないのではないのかな、と思わせるような女性もたまには見受けられる。しかし、多くの女性は、明らかにすっぴん顔ではなくきれいにお化粧している。「天津」でのこと、夕飯までの間の時間つぶしに散歩にでたときの事。その日は少し風が強かった。「天津大学」の正門前の大きな通りにでると、向こうから10数人の自転車に乗った異様な姿の女性の集団に出会った。その顔には、一様に「マフラー」が巻き付けてあったのである。首ではなく顔にである。その集団は私の目の前を猛烈な勢いで通り過ぎていった。一瞬唖然とした。それは化粧を施した顔が砂塵で汚れるのを防ぐための手段であった。女性心理はどこも同じかな。この次はおみやげに「日本製の化粧セット」にしようかな。

**4つめは、物価が高くなった**ことである。'95年の物価上昇率は約15%で'96年の物価上昇率は約10%である。それに伴い給料も上昇したらしいが'95年に中国は給料制度改革を行った。それまでは、「同一労働同一賃金」であったが、給料改革以後、学歴に応じた「給料」制度に改めた。中国の大学進学率は就学人口の3%~5%であり、大学卒は超エリートであり待遇改善は当然である、と考えられる。その結果、中国国内で、貧富の差がでてきたのである。当然の事ながら、片や運転手付きの車の車内で「携帯電話」を片手に「スーツ」に身を包んで商談を進める人もいれば、汚れた垢まみれの服装で道ばたで食事をしている人もいる。共産党全盛の時には想像もできなかった大きな変化である。それに伴い、前述したように犯罪も多発しているらしい。たしかに、前回に較べてホテル代が約2~3倍になったし、地下鉄の料金が2年前に較べて4倍になったと中国の友人は嘆いていた。しかし、我々が招待を受けた家には、「電子レンジ」や「冷蔵庫」「カラーTV」「ビデオデッキ」「ビデオカメラ」等があった、とはいえ、中国全土で約6千万人が極貧状態(読売新聞既報)にある現実をどう考えればよいのか。

そのほかに、前回と変わったことといえば、〈公共の場では禁煙〉になったことである。中国ではたばこを吸う場合は必ず周りの人に勧めてから自分も吸うのがタバコのためのマナーとされてきた、あの、「たばこ」好きの中国人がこの方針を受け入れたのである。確かに、レストランでもタバコを吸う人は少なくなったような感じがするし、我々を送迎してくれた「天津大学」の運転手さんは、何とか言う耳の後ろに付ける薬で3日目にしてタバコの量が半分に減り、1週間くらいでやめられる、といていた。

## 廬溝橋史料陳列館（中国人民抗日戦争記念館）

この博物館は、マルコポーロが”世界でもまれに見る美しい橋”といった「廬溝橋」の近くの「宛平城」内にあり、北京市より「中国原子能科学研究院」へ向かう途中にある。1987年に完成したこの博物館は、表題のごとく日本人にとってはあまり歓迎したくないような内容である。しかし、事実は事実として謙虚に受け止めるためにあえてこの場で述べさせていただきたい。記念館の正面の外形は、古くから親しまれている「牌楼（鳥居）」様式に倣い、濃い灰色の瓦屋根作りで、東西2つの城門の城楼からなっている。正面玄関には「目覚める獅子」の大型の彫像が突立っている。展示室は、第一展示ホールと第二展示ホールがあり、第一展示ホールは「九一八事変（日支事変）」から抗日戦争までの14年間の歴史事件に関する文献や写真が飾られており、「731細菌部隊生体解剖」「南京大虐殺」などの復元現場で、日本軍国主義の侵略の実体が述べられている。第二展示ホールは、地下道線復元現場などで主に「蒋介石軍」との戦争の実体が展示されており、中国国内の内戦と建国へと至る過程が描かれている。日本軍を悪者に仕立て上げ、中国共産党政府の宣伝に利用されている、との感じが多少するものの、年間百万人以上の中国人がこの記念館を訪れ、これらの展示物を見学している点を考慮すれば、この展示館を見過ごさわけにはいかない。展示ホール内には、「日本軍の侵略によって（1931年－1945年）中国軍は3500万の死傷者をだし、経済損失は5000億ドルである」と大書されており、また、「前事不忘、後事之師」とも大書されている。今でも「残留日本人孤児」の訪日調査等も行われており、まだまだ「戦争」の2字は当分の間我々の前から姿を消しそうもない、と感じた。



廬溝橋史料陳列館（中国人民抗日戦争記念館）前にて、右側が「目覚める獅子」の彫像  
案内してくれた中国原始能科学研究院「高嵐」嬢とともに

## 中華料理について

世界中の美食家に知られ、高い評価が得られている「中華料理」について、私見も交えて述べてみたい。ご存じのごとく「中華料理は」北部、南部に分かれている。通常、中国では、長江(揚子江・黄河ではない)を境にして、北と南という。北部の料理の味付けは濃厚で、炒菜(炒め物)や炸菜(揚げ物)、塩辛い漬物が多く、南部の料理は、淡泊で蒸菜(蒸し物)や焼菜(揚げ物)が多い。中国の死亡率のトップは、「肺ガン」と「心臓病」である、といわれている。確かに、中国の漬物(咸菜)は、食べると舌にびりびりとくる。これを中国風お粥(米粥)に入れて食べるとこれが美味である。体調不良の時や脂っこい中華料理に食べ飽きたときなどにおすすめである。でも、どうしても中華料理以外を食べたいときは、カーネル・サンダース叔父さんの「ケンタッキー・フライドチキン(肯德基)」や「マクドナルド(麦当劳)」で「コーヒー(珈琲)」か「ホットドッグ(熱狗)」にありつくか日本製や中国製の「インスタントラーメン(方便面)」をお薦めする。

では、ここで「宴会」でのマナーについて述べてみたい。

まず、ホストはあなたを出迎え、お茶を飲みながら団らんをする。その後、ゲストを円卓に案内する。普通ホストは入り口に向かって座り、ゲストはその右と左に座る。テーブルの上に箸が一膳余分にあるが、これはホストが使うためのもので、ホストが左右のゲストに料理を取り分けると、それが食事の始まりである。ただし、ホストがゲストの健康に乾杯する前に飲み物を飲むのはマナーが悪いとされ、また、ラーメン等を音を立てて食べるのもマナーが悪いとされる。次々と乾杯しながら宴会はにぎやかに続けられていく、料理も次々に運ばれてくる。ここで注意しなければならないことは、決して最初の何皿かを五分で食べるようなことはしないことである。必ず、メインの料理が運ばれてくるまでは自制することである。また、どんな料理でも一口は試してみるのが礼儀と考えられている。宴会では強いお酒で何回も乾杯をするが、中国人はお酒をあまり飲みません。知らない人の前で酔った様子を見せるのはみっともないことと考えられているからです。

最後に中国旅行をする場合の注意点をのべる。

①中国旅行の必需品は、トイレットペーパーと胃薬です。

通常、中国のトイレには「トイレットペーパー」は準備されていません。また、近年、増えている有料トイレ(収費廁)やホテルなどに備え付けのトイレットペーパー(赤色や白色)は水に溶けません。中国では、ゴミ箱はトイレにある。その使用方法是ご想像にお任せします。また、中国料理は、北部では油の強い料理が主流です。よほど油料理が好き

な方か頑健な胃袋の持ち主以外は、毎食後胃腸薬または消化剤を服用した方が賢明です。

#### ②水道の水は飲みません。

中国では、水道の水は浄化しませんので飲用としては不可能です。「天津」および「上海」の水道を日本で検査した結果、一般細菌や大腸菌が多く飲用できないとの結論でした。従って、口に入れる飲み物としては「玉泉水」や「鉱泉水」等の「天然水（約3元）」を飲用するか、または多少高いですが「エイビアン（約16元）」等のミネラルウォーターを利用するかですが、歯を磨く程度ならばポットに入っているお湯の湯冷ましで十分です。

#### ③古い電話番号は利用できません。

現在、中国では「携帯電話」や「ポケットベル」等の増加が一般の電話の加入者の増加と併せて急激に増加しております。それに伴い、電話番号の増設が急務となっておりますが間に合わないのが現状です。北京では'96年8月に電話番号が変更になりました。局番方式をとらないこの国では、番号が全く変わってしまいます。（例：2552451→62785001）しかも、番号案内の「114」は名前からは検索できないし、しかも古い番号から新しい番号を調べるので、古い番号を知らないと検索できない。もし個人の番号を検索したければ職場の番号から探し出さなければならない。特に注意すべき事は、古いガイドブックに乗っている緊急用の電話番号は全く役に立たないので最新の電話番号を調べておくべきでしょう。

万が一トラブルに巻き込まれた場合は、下欄の連絡先へ連絡すること。

#### ④カタカナ中国語はあまり通じませんよ。

現在、旅行用に「カタカナ表記」の中国語の本が出回っています。でも、私が現地の中国人に試したところでは、「カタカナ中国語」は半分以下しか通じませんでした。もし、カタカナ中国語を話さなければならないときは、筆談をお薦めします。もし、あなたが多少なりとも中国語を話せば歓迎されます。中国では中国語を話せば「中国人」で話さなければ「外国人」だからです。

今や世界の人口の5人に一人強は中国人である。中国は自由主義経済へと脱皮しつつあり、世界を席卷した華僑パワー（13億人）が総力をあげて国作りに取り組んでいるように感じられます。若いパワーをどんどん外国へ派遣し、一方国内では30代の若者たちを企業・機関の指導的なポストに就けている。眠れぬ獅子がようやく立ち上がったところかな。

---

旅行者相談所（北京）：TEL 513-0828 24時間受け付け、「日本語、英語、中国語」OK  
JTBトラベルディスク・北京：TEL 6603-9149